（2）調査旅費　　1／1　ページ

行政視察　　**小森　隆一　　議員**

日時：令和6年11月12日（火）～11月14日（木）
場所：奈良県宇陀市、徳島県鳴門市

| 区間 | 交通手段 | | 鉄道賃 | | 特急急行 | 飛行機 | その他 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | キロ | 金額 | | | | |
| 佐野～東京 | 鉄道 | | 89.5 | 1,130 | | | | 1,130 |
| 東京～京都（ひかり635号） | 鉄道 | | 513.6 | 8,360 | 5,490 | | | 13,850 |
| 京都～榛原 | 鉄道 | | 70.4 | 1,290 | | | | 1,290 |
| 榛原～鳴門 | 鉄道・バス | | 219.9 | 1,430 | | | 4,100 | 5,530 |
| 鳴門～新神戸 | 鉄道・バス | | 146.0 | 430 | | | 3,600 | 4,030 |
| 新神戸～東京（ひかり508号） | 鉄道 | | 589.5 | 9,460 | 5,490 | | | 14,950 |
| 東京～佐野 | 鉄道 | | 90.0 | 1,150 | | | | 1,150 |
| 北千住～館林（リバティりょうもう25号） | 鉄道 | | | | 1,250 | | | 1,250 |
| 計 | | | | 23,250 | 12,230 | 0 | 7,700 | 43,180 |

| | |
|---|---|
| 宿泊料@16,500×2泊 | 33,000 円 |
| 交通費 | 43,180 円 |
| （うち航空運賃 | 0 円） |
| 計 | 76,180 円 |

上記の金額は、佐野市職員等の旅費に関する条例及び佐野市職員等の旅費支給規則により算出した金額である。

議事課庶務係長　　岩上　裕一[redacted]

※金額や発行元などが、枠内に収まるよう、また重ならないように添付してください。

令和７年３月２８日

佐野市議会議長　川　嶋　嘉　一　様

公明党議員会　小　森　隆　一

公明党議員会行政視察報告書

１　期　日　　令和６年１１月１２日（火）～１１月１４日（木）
２　視察地及び視察事項
　（１）奈良県宇陀市
　　「移動診療車について」
　（２）徳島県鳴門市
　　①「フェーズフリーについて」

３　参加者　　木村久雄、菅原達、小森隆一

４　視察概要　別紙のとおり

# 宇陀市視察概要

1　奈良県宇陀市

**宇陀市の概要**

（令和６年４月１日現在）

・人口　　27,094 人
・世帯数　12,680 世帯
・面積　　247.50 ㎢
・議員定数　　12 人
・現議員数　　12 人
・政務活動費　交付対象…議員
　　交付額…年額 360,000 円

**視察概要「移動診療車について」**

１．目的

・宇陀市では、高齢者が安心して暮らせるまちづくりを目指しているが、人口減少による行高齢化、医療・介護におけるニーズの増加、地域医療の担い手である開業医の高齢化、後継者不足、高齢になっても暮らし続けられるしくみの構築等が課題となっている。
そんな状況の中、令和４年より、動く診療車として、診療所機能をもった「移動診療大型車両」により診察や検査等を提供することで、第１次医療体制の安定化を図り、市民の健康維持を推進するとともに、地域住民のコミュニティの場を提供する事業を行っている。
・今回現地見学を行い、高齢者が安心して暮らせる今後のまちづくりの一環として、へき地医療対策の移動診療車について研究する。

２．内容

（1）「移動診療車」概要

〇コンセプト

・「医療が家の近くまで迎えにいけばいい」～移動診療車による安心して暮らせるまちづくり～
・宇陀市移動診療車：Uda Mobile Clinic　通称　UMC

①UMC の概要

・大きさ：全長 9.8m　　全幅 2.5m　大型バスとほぼ一緒

②導入費用

・総事業費　9,167 万円（車体　約 450 万円、医療機器　約 450 万円）
・財源内訳　企業版ふるさと納税　500 万円、合併特例債　8,230 万円、一般財源　437 万円

③搭載医療機器

・X線撮影装置、モニター付き除細動器、迅速血液検査機、超音波診断装置、自動尿分析装置、体組成計
・設備搭載している医療機器は、診療所と同等レベル⇒　全国初

④診療日と診療場所

・週で午前中３日（水、木、金）、午後１日（火）・場所は３か所

⑤診療スタッフも充実
・医師１名（常勤、３名で交代、３名とも総合医療科医）、看護師２名、事務職２名、運転手１名
⑥診療
・一般内科（慢性疾患、急性疾患治療）、創傷処置（けがの処置、縫合）
・その他、整形や泌尿器科、皮膚科等幅広い診療を実施
・各種特定健診、がん検診等も実施
⑦患者数（令和５年度）
・1,843名
⑧運営費用（令和５年度）
・人件費1,440万円、委託費815万円、保守料205万円等を含め、合計2,587万円
⑨地域医療の課題
・開業医の相次ぐ閉院
・開業医の高齢化・後継者不足
・サービスを提供する従事者が減少
⑩導入に至るまでの経過
・宇陀地域の医療を考えるワーキングチームの設置より、約３年後に診療車導入決定し、４年後の令和４年５月より事業を開始
⑪効果：医療需要に対応できる「UMC」
・受診しやすく、地域の交流の場→早期発見、重症化予防、フレイル予防
・地域に住む高齢者➡地域の場所（公民館）➡UMC
・交流が図れ、見守りができ、地域の役割も生まれ、人の交流が活発になる
⑫これまでイベント、地域交流が盛んに実施されてきた
⑬今後の課題
・患者の確保（受診者がほぼ固定化、健康状態不明者、治療中断者）
・医薬品（院外薬局が自宅から遠い、院外薬局に所報された医薬品がない、配達料１件500円の負担）
⑭今後の展開
・受診者の拡大（地域協力を得て移動診療車の周知を図る、患者へのアプローチ）
・診療エリアの拡大（必要とされる地域の調査、市役所や医師会と協力してエリアを拡大）
・オンライン診療

３．所感
・移動診療車については、今後の課題も様々あるようであるが、宇陀市では10年後も続く地域医療のために、その間、医療の進歩、医療のニーズの変化、メンバーの変化、地域の年齢構成も変化、そして世の中も変化するであろうが、そういった変化にも柔軟に対応しつつ、腰を据えて質の高い医療を提供し、市民の皆さまから頼られ、愛され、宇陀市にとって欠かせない存在となれるよう、地域に愛される診療車を目指しオール宇陀市で努力していくこととしている。
・佐野市においても、今後のへき地医療のひとつとして、クリニック並みの機能を備えた「移動診療車」は、通院の困難なへき地の医療を支えるだけでなく、有事の際には避難所や被災地への派遣も可能であることから導入検討も必要であると感じた。

# 鳴門市視察概要

2　徳島県鳴門市

**鳴門市の概要**

（令和６年３月 31 日現在）

・人口　　53,549 人
・世帯数　26,069 世帯
・面積　　135.66 ㎢
・議員定数　22 人
・現議員数　22 人
・政務活動費　交付対象…議員
　　交付額…交付額…年額 300,000 円

**視察概要「フェーズフリーについて」**

１．目的

・最近の防災の考え方として「フェーズフリー」という概念がある。フェーズは「局面」の意味で、日常と災害時の局面をなくす＝フェーズをフリーにして、ふだんの生活のなかで使うものを防災にも役立てていこうという考え方である。

・徳島県でも大きな被害が想定されている南海トラフ巨大地震に備えるために、このフェーズフリーの考え方が注目されており、“備えない防災”とも呼ばれるフェーズフリーに、地域をあげて取り組んでいるのが鳴門市である

・今回現地訪問をして、市を挙げての「フェーズフリー」の取り組み方について学ぶ機会とする。

２．内容

①“ふだん使いを災害時にも”　子どもたちも考える

・鳴門市では子どものころから防災の知識やスキルを自然に身につけてもらおうと、フェーズフリーを取り入れた教育が進められている。

②市を挙げての取組

・鳴門市は一般市民から、行政、学校といろんなレベルでフェーズフリーを取り入れることで、災害の対応という問題を解決できる一助となっている

・危機管理の予算だけでなく、教育や福祉の予算、街を豊かにする政策が災害時にも役立つというフェーズフリーを実行している。

・令和６年５月に竣工した新市役所は、消防本部に隣接しており、フェーズフリーの概念が十分に取り入れられた建物である。

③人気の「道の駅」も“持続可能な防災”

○道の駅「くるくるなると」

・建物は地元特産のグルメが味わえるとともに、子どもたちが遊べる遊具も整備され、週末になれば、たくさんの家族連れや観光客でにぎわう人気スポットである。

・海に面した鳴門市の津波避難場所に指定され、いつ地震が起きても逃げられるように 24 時間開放されている。ここにもフェーズフリーの考え方が取り入れられている。

・例えば、緑の坂はゆるやかなスロープになっており、道の駅を訪れた親子連れなどがそりで滑り降りて遊ぶ場所であるが、地震が起きて津波から逃げるときは、高齢者や車椅子の人が登って高い所まで避難しやすくなっている。ふだんは遊び場、いざとなったら避難路という考え方で作られている。
・売り場の棚には、約２５００種類の商品が販売されている。災害時の避難生活のためには食料や水の備蓄が必要だが、これだけの量の食料を災害時のためだけに備蓄するとなれば、消費期限切れのものを入れ替えなければならず費用がかかる。そこで、商品を“備蓄食料”と考えることで、こちらでは災害時に1000人の避難者が3日間、生活できるそうである。
・防災のためだけに無理をして備えないことが、“持続可能な防災”につながるという発想である。
・鳴門市はほかにも、市内の登山情報を載せた地図をハザードマップ（災害想定地区や避難場所を記した地図）としても使えるようにしている。
④道の駅の効果
・定量効果：年間来場者　約130万人
・定性効果：100を超えるメディア露出（地域の魅力を全国に発信
・交流人口拡大と地域活性化を図る、四国のゲートウェイ化を着実に推進
　➡鳴門市の自体の認知度。知名度向上（フェーズフリーの推進も）

３．所感
・今回の視察において、市庁舎や道の駅、更には学校教育にまで、「日常時」と「非常時」の境を無くすことを概念とする「フェーズフリー」をまちづくりに取り入れることで、コスト削減と市民サービスの向上、そして何より市民の防災意識の向上に繋がっている事が確認できた。
・佐野市においても「フェーズフリー」の概念を基本とした考え方、そして行動を市民の皆さまに広く知ってもらい、まち全体で取り組む必要性とそれによる効果が高いと感じた。